指宿の
民俗芸能・民謡

指宿市無形民俗文化財保存会

目　次

あいさつ …… 1
ごちょう踊 …… 2
庄五郎踊 …… 3
ちょいのちょい …… 4
棒踊 …… 5
坂田踊 …… 6
奴踊 …… 7
唐人踊 …… 8
猿の子踊 …… 10
さまふり …… 12
ごじょんけ唄 …… 13
とんにやぼ …… 14
馬方踊 …… 16
四つ竹 …… 18
虫とり唄 …… 18
しょんが節 …… 19
指宿港小唄 …… 19
いぶすきの唄 …… 20
指宿温泉小唄 …… 20

あいさつ

指宿市無形民俗文化財保存会
連絡協議会長　鶴　岡　義　雄

民俗芸能（無形民俗文化財）は，郷土に生きる人びとによって生み出され，育てられてきた貴重な文化財です。そしてそれは，今もなお各地域の生活と密接に結びついて生き続けています。

最近，ふるさとの再発見の動きが強まっていますが，こうした中で，郷土に伝えられてきた民俗芸能に対する関心も高まり，民俗芸能復活の動きも各地で見られるようになりました。

このような時にあたり，私どもは郷土に残る民俗芸能に対して正しい理解と深い愛情をもち，私どものためにも，また，私どもの子孫のためにも，貴重な文化財として正しく伝え残す努力を怠ってはなりません。

さて，指宿で古くから踊りつがれ，謡いつがれた郷土芸能，民謡は豊富です。これらを概観して，その特徴としてあげられることは，第一に男子だけでおどる踊りが多いこと。楽器も鉦，太鼓を用いるものが多く，三味線のような室内楽器はあまり用いられない。内容も勇壮活発なもの，重厚荘重なものが多い。第二に島津の殿様温泉があった関係から島津にゆかりのあるものが多く，従って唐人踊りとか坂田踊りといった他郷から移し入れたらしいものがみられること。第三に農民の農作とつながりをもつ祭祀的な意味をもったおどりや歌がみられること。第四にいろいろの講の時や酒宴の場で踊るというより，演ぜられたと思われる演劇的要素を含む踊りがみられること，等です。

民俗芸能は「ふるさとの心」を表わすものといえましょう。こうした「ふるさとの心」が人びとの明日への活力の源となり，また新しい文化創造のエネルギー源となるものと考えます。

民俗芸能保存会としては市民の方々に，いぶすきの民俗芸能を正しく知ってもらい，まもり，育てていただくために，それをここに，まとめてみました。

最後に，長年多くの困難の中で，郷土のすぐれた民俗芸能を正しく伝承され，このいぶすきの民俗芸能刊行に御尽力いただきました保存会の方々の皆さんに，心からお礼を申し上げて，あいさつとします。

◎ごちょう踊　（中川）

祝事や祭典に昔から踊られたものです。

この踊りは唄がなく大小８個の鐘と大小２個の太鼓が打ち鳴らす千変万化のリズムとメロデーによって踊る絢爛目もさめる豪華版であります。

服装は鐘たたきがかすりの着物にたすきがけ，大は洗面器位のものから小は皿位のものまで８種類の鐘を１人１個宛持ち，変化極りない調和のもとに夫々音色の異る鐘を打ち鳴らしながら面白おかしく踊りまくるのであります。この鐘たたきが８人１組，一応出来上がるまでには50日を要し１人前となるには３年かかると云われています。

太鼓たたきは目もあざやかな極彩色のいでたちで大小２個の太鼓を各１個ずつ前に抱き太鼓は色どりどりの粉飾をほどこし鐘との調子に合わせ打ち鳴らしながら踊ります。

この他に顔に鬼面をつけ陣羽織に刀のいでたちをした鬼人と，京の大原女に似たいでたちの女形が加わって趣を添えますが，鳴物の美しい調子と目ざめるばかりの装飾とが渾然ととけ合った純然たる声なき踊りであります。

市内中川，岩本地区に伝わっていましたが，最近では服装と道具の経費の関係上，中川地区だけに伝承されています。

◎庄五郎踊　（石嶺）

今を去る500余年前応永7年薩摩の国池田信濃守（現在の指宿池田湖の東清見岳に居城して居た）が肝付勢に攻められ戦困難を極めたがよく戦いその城を守り得た。その喜びの宴を開いた時に庄五郎と云う芸達者な武士が殿の前で面白く踊ったのが基でその後現在の石嶺地区に代代伝えられたものとされています。

唄は変化に富んだ心よい民謡調で踊りによく調和したメロデーが感ぜられます。

踊りは純然たる手踊りで紅白の長い鉢巻，長紬のゆかた地にたすきがけ22，23名位で男衆のみ見るからに美しい調和のとれたものであります。

唄

1. 今度このちょうにゃ80余の親父どの　おーきーには
　込ろをあらまし隠居の婆様それをきく　おーそーらい
2. 45をきろよと言うたれば　おーきーには
　隣の挨拶婆様を眺むる庄五郎どの　ばさまを眺むる庄五郎どの おーきーには
　隣の挨拶婆様を眺むる庄五郎どの　あーそーらい
3. 小鳥品々こがら，山がら，四十がら　おーきーには
　鶯鳥（うそどり），駒鳥（こまどり），雲雀に鶯（うぐいす），時鳥，雲雀に鶯，時鳥　おーきーには
　うそ鳥，こま鳥，雲雀，に鶯，時鳥　おーそーらい
4. 桜，品々彼岸桜や人桜
　おーきーには　おでんもがま惚々すとらのをちりかやす
　惚々すとらのをちりかやす　おーきーには
　おでんもがま惚々すとらのをちりかやす　あーそーらい
5. 島の権現にゃ娘の髪をなしさんど　そうじゃろだい
　空では通わんでろ　おいら後家ぞ　あーそうかい，そうじゃろだい　そうじゃろ
　そうじゃろ

◇ちょいのちょい　（小牧）

島津義弘が朝鮮征伐のがいせん祝として唄い踊られ，以後祭典や祝事に年々伝わって来たものです。

唄は戦国時代の武士の唄にふさわしい棒踊りの様にいさましく，男らしいメロデーが感ぜられる唄であります。鳴物は太鼓，鐘，踊りは実にはでな服装が目立つ。色物の着付に鉢巻，たすき，手甲，脚絆，足袋，草鞋，刀，扇子のいでたちで２人１組となって踊りますが，棒踊りのように打合わないで身振，手振で踊る一種の武士踊りです。市内小牧地区に伝わっており，後継者の育成とに毎年保存会の指導の下に，今和泉小学校の文化祭では生徒による発表もされ，立派に継承されています。

唄

前　唄　　1.　これのお庭は南天軸よ

　　2.　東小間戸はきろまいものよ

　　3.　物のみごとはよせだのほんじょうかよ

踊　唄　　1.　だき合うて寝ればなさつきさえてむ

　　2.　焼野の雉子は岡の瀬にすむ

　　3.　山田の牛は木を引き出す

◇棒　　踊　（岩本・田之畑・下里・新西方）

◀田之畑

▶新西方

田植踊，才田踊などとも言われ，古くは田植前後の豊作祈願の踊りであったらしいが，その後神社の祭や諸行事に踊られるようになったものです。

島津義弘が朝鮮征伐のがいせん祝いに踊ったものとか，又一説には尚武のくに島津藩内にこの踊りを広めて藩民の志気を鼓舞したとも伝えられています。

唄は歌詞が非常に短いのに比べて変化に富んだ美しい節廻しで，威勢よくながく歌いつづける特色あるもの。鳴物は鐘。

踊りは往時の薩摩隼人の気質そのままの勇壮活発なもので薙刀，大鎌，６尺棒，尺八等を持った15，６名が入り乱れて打合う，１人が間違えば大ぜいがけがをすると云う技術的にもなかなかむずかしい一大剣劇であります。

服装は義士打ち入りそのままと言ったところです。

鹿児島県の代表的な郷土芸能の一つであり，島津氏の勢力のおよんだ地域一円に広く踊られ，約400年の歴史がありますが，棒踊は指宿市内では岩本，田之畑，新西方，下里の４地区は今尚盛んである。岩本，田之畑，新西方のものは大鎌，６尺棒，３尺棒を使いますが，下里のものは天蓋をかむった虚無僧が入り薙刀，大鎌，尺八を使って踊ります。虚無僧は当時盛んに島津藩に潜入した隠密か？，さもあれ奴踊と共に無形文化財として永く保存したいものの一つであります。

歌　　詞

1. 後は山で前は大川

（義弘が飯野在城のとき真幸一円の諸地域は悉く義弘の旗下に属し，後に球磨境の連峰を負い，前は川内川の上流に臨み，その天険無双を賞美した詞である）

1. 焼野の雉は　岡の瀬にすむ
1. 山太郎蟹は　川の瀬にすむ
1. 山辺の雲は　鷹の羽重ね

◎坂　田　踊　（宮）

島津氏参勤交替に上る途中を唄い込み旅のつかれや又はつれづれをなぐさめたものを帰藩後唄い踊ったものとされています。

唄は美しいメロデーは感ぜられませんが，非常に上品で踊りとよく調和のとれたものであります。鳴物は鐘，太鼓

この踊りは一名武士踊りともいわれ，唄と共に上品な優雅な踊りです。すげ笠，紋付，はかま，二本刀にわらじばきで男衆のみ，出場は１列にのれんを分けて入り，一礼ののち踊りはじめる。
はじめは円陣で４節目で２列となり，五節目で横隊正面に進んで一礼ののち退場する純然たる閲兵分列のしきたり，こうして藩民あげて殿に忠誠を誓ったものでありましょう。唄と踊りのぴったり合った優雅此上もない点ではいぶすき民謡の随一と云えましょう。現在宮地区に残って居ります。

1. 坂田出る時ア泪で出たが
   今じゃ坂田の風もいや　坂田の今じゃ坂田の風もいや
2. 遠洲浜松庄屋が娘
   黄金たすきで塩はかる　たすきで黄金たすきで塩はかる
3. 諸国諸大名弓矢で殺す
   茶屋のおまんは目で殺す　おまんは，茶屋のおまんは目で殺す
4. さてもその後杉内様よ
   とらの思いは富士の山　思いはとらの思いは富士の山
5. さても揃ったよさむらい様よ
   いねの穂よりもまだ揃った　穂よりも，いねの穂よりもまだ揃った

◎奴　　踊　（新西方・玉利）

島津義久が肥前島原の城主龍造寺山城守高信を攻め，その首を取った時の戦勝祝として指宿神社の祭典に奉納されたのがはじまりとされています。

又一説には指宿氏の敗戦のうさばらしとも云われています。いわゆる男の踊りとして棒踊りと共に全国的に珍しいものであります。唄は前唄と本唄に分れ前唄は踊手が踊りながら歌うゆっくりした調子のものですが，本唄となるとテンポも早くメロデーに富んだ美しく心よい唄であります。鳴物は鐘。

踊りは奴に似た服装で顔にはどぎつい色どりをし，親兄弟にも見分けにくい様にし長い刀をもち反り身，全身をくねらせて地団駄ふみ，りきみかえって踊る実に勇壮活発なものであります。踊り手は14，５名で男子ばかり，最も異色あるもので服装などから棒踊りよりも古形をもった祭事的な踊りとも考えられる。

奴踊りは市内新西方，玉利各地区に唄，踊り共全く同じ型で今尚盛であります。

前唄

みどう（身堂）が若い時ア　腕に生傷たえなんだ
　５つ６つばっかい　今も絶えなんだ

本唄

1. 肥前船にもヤケーどっこいどっこいちこうゆておれば
　油積まずに便そえた　ヤアレ便そえた
　油積まずに便そえた　さまういさまうい
2. 今のせんしは　ヤアどっこいどっこい　牛の子の育ち
　つのはもたずに　つこうつこうと　ヤアレつこうつこうと
　つのはもたずに　つこうつこうと　さまういさまうい
3. 千女亀女は　ヤアーどっこいどっこい　道ばたんくわから
　通るにせんしを　引きよせる　ヤアレ引きよせる
　通るにせんしを引きよせる　さまういさまうい
4. 升（ます）は白金　ヤーアどっこいどっこい　黄金のとかぎ
　金を俵にはかり込む　ヤアレはかり込む
　金を俵にはかり込む　さまういさまうい

◇唐　人　踊　（中小路・宮之前）

これは島津家南方政策はなやかであった頃のものです。

琉球から島津家へ貢物する際に次の貢船来航迄人質を置いたと云いますが，この人々が島津家のいぶすき別邸に伺候してつれづれに唄い踊ったものだと云われています。

唄は全然意味不明でところどころ解明される個所もありますが，琉球語ではないと云う説もあります。

鉦，太鼓，笛等の鳴物を混えて如何にも哀調をおびた南方色豊かな唄であります。市内中小路地区と宮之前地区に残っており内容も同じでありますが，宮之前地区のものは初めと終りにはっきり意味の分る唄が入って居ります。

中小路地区の踊りはゆかたに博多帯をしめて太鼓２，鉦２，大扇12〜16位で男衆，琉球踊りそっくりの異色ものです。

宮之前地区のものは笛が入り，これも如何にも琉球人らしいいでたちで，ゆったりと踊る民情豊かなものであります。

島津家南方政策盛んで往時をしのばせる当地方唯一の異国物として珍重されています。

唄

中小路地区のもの

にっぽんの，きっねあーしたばくればさんよー　ちぎょうとらるるもうてんよ，
あーもてんよ　もてんよ　あめるはへいいよういちれてななやはきやくなー
かたんだつうしもつんねてあーこのしんきんやー　そいじゃがおきよひろのめし
たばこやあーけさねきゃくふのうんじゃあーやはあーはんはんあーそらい
ちょきんようようきんさんきんちようそらいつれよう
てななやわししれおわいごててんのほい　いよもんどろうや，あーいこめしや
うふふんうふふん　いよさんきれてななやわはちれるにじんそうもんでんとうほう

あーしんつんほうほうはつれ　れんしーれんしーこあーこのおひはひわいほしそいぢゃ，ぜいわいほしやあこれなはるうてしんきや，はんはんあーそらいかあかあかあるもそらそらうめ，そらずもんめのかねがわええこいちごたごててんのほい，いよにゆうはくわにわくいようにゆうくうくうにゆうらくわぬ
おーうふふんふふん

1.　1里半の道粟ときぐうえてほい
　あわずかえるきみの　わるさあらべのよいさっさ

2.　なべがさずきんの　はなのやっやいね
　こなべなべがさんによんこんつの　のどがさであらべのよいさっさ
　おぢやはれなんせんぶらぶらやあーほい，あいよなんせんばいらな
　つよのたまてつかいぢ　やあつ，おだまんきよよんざんけぢやはれはかんざんぜっとうぢゃはれわいさかぢゃほいさ　かぢや　そんさかすさつえんべす，
　ようふだおさまるえ　さんやえ　さんや

尚宮之前のものはこの後に次の歌詞が加えられます。

明日は発つたつ鹿児島を発つが
　もはや桜島後に見る　ハイヤ　ピピピ（笛の音）
佐多の岬のお庭のそてつ
　花は咲かせんどんかい　葉がみごて　ハイヤ　ピピピ
物の見事は那覇の町
　黒い物売　紺地うり　ハイヤ　ピーピーピーピー
物の見事は那覇の町
　白い物売　豆腐(おかべ)売　ハイヤーピピピ

（宮之前唐人踊）

◇猿の子踊　（下門）

今から凡そ200年延亨2年今和泉家島津忠郷が日向青島に遊んだとき旅芸人の猿使いの芸をみて非常に感心し，その猿使いの芸人を領内に招き住ませて多くの猿を飼いならさせ芸を仕込んで毎年春と秋の2回，この猿芸を領民にみせてかねての労苦をねぎらいあわせて働かないものは食にありつけないと云う教訓として，ながく後世に伝えたのが現在の猿の子踊りであると云われます。

猿使いの命令にしたがって親猿，子猿が入り乱れて様々な芸をするのでありますが，その特異な扮装と奇妙な動作がしかも整然と続けられていくところは実にみごとなもので一般に歓迎せられております。

ことにこの踊りに出てくる人物は猿使いのいかめしい装束に芝居調のせりふが目立ち猿は70歳から6歳迄の子供をまじえて各々独特の妙技を発揮するが太鼓，笛，鐘との調和が又何とも云えない美しいものであります。唄のない鳴物だけで調子に合わせて踊る唯一の動物もので無形文化財としての価値充分と云えましょう。市内下門地区に残っている。

詞

猿使い　さてさてよも猿共は里下りをしてこの団子の木を見かけて来たなア

おおそれなら帰りて孫ひこ，子供を皆連れて来い

ここですべての猿共が勢揃いする

猿使い　さてさてよも猿共はだんごがほしいなら「いなほい」の行(はれ)をいたせ

ここで猿共は太鼓や笛や鐘の調子に合わせて面白おかしく「いなほい」の芸をする

猿使い　「いなほい」の行もよいが「こうがらし」の行をいたせ

ここで猿共は同じく「こうがらし」の行をする（以下同じ）

猿使い　「こうがらし」の行もよいが「さかがえり」の行をいたせ

前に同じ

猿使い　「さかがえり」の行もよいが「くるくる廻り」の行をいたせ

前に同じ

猿使い　「くるくる廻り」の行もよいが「はげがえり」の行をいたせ

前に同じ

猿使い　「はげがえり」の行もよいが「せんつるぎ」の行をいたせ

前に同じ

猿使い　「せんつるぎ」の行もよいが「とびごえ」の行をいたせ

前に同じ

猿使い　さてさてよも猿共は団子がほしいならとどいてみよ

ここで猿共は団子の木の枝にとび上ってとどこうとするがとどかない

猿使い　とどいてもとどかんならゆーさゆーさとゆすってみよ

猿共は団子の木をゆするまねをするがだんごは落ちてこない

猿使い　ゆすってもあえんなら（落ちないなら）こちらが１つとってふるまおう，

やあ　あすこもか，こうこもか，まあだもか（だんごを投げる手振りをする）

それでもふるわんなら（ひろわんなら）ぱらぱらとまいてふるまおう

ここで猿共は各腹一ぱいだんごをたべる

猿使い　だんごもたんぶらいとふるもうたが元のみ山にからからかえれ

これで猿共は芸を終って退場する

猿の服装は赤づきんに赤い着物（猿の形に作った一枚もの）で顔は赤く猿の顔に扮飾する親猿，子猿　合計２０名位

◎さまふり　（高之原）

島津氏参勤交替を無事に終えて懐しい鹿児島へ帰る道中を唄い込んだもので長い旅のつれづれをなぐさめたものが帰藩後伝えられたものであります。

唄は上品で優雅，メロデーの美しいゆるやかな民謡調は聞く人をして陶然とさせます。この唄は調子が長く変化に富んだ特徴あるものであります。鳴物は鐘。さまふりは坂田踊とよく似たもので，すげ笠，紋付，はかま，二本刀にわらじばき男衆のみの踊で上品優雅な点は坂田踊と好一対であります。高之原地区に現在残って居ります。

歌　詞

1. 目出度のナー　うれしヨイヨイ　うれし目出度のーいしなもんの
　サッエン　サッエン　サンサン
　あれは，これはの若松に　枝も栄える葉もしげる　ハラハラ

2. となかにナー　冲のヨイヨイ　冲のとなかにのー　いしなもんの
　サッエン　サッエン　サンサン
　あれは，これはの茶屋立てて　上り下りの舟をまつ　ハラハラ

3. からすがナー　あわのヨイヨイ　あわのからすがのー　いしなもんの
　サッエン　サッエン　サンサン
　あれは，これはのかおかおと　かねはもたずにかおかおと　ハラハラ

4. さまふりがナー　もろのヨイヨイ　もろのさまふりがのー　いしなもんの
　サッエン　サッエン　サンサン
　あれは，これはのかいましょと　よかろさまじゃな揃ろてかえりましょ
　ハラハラ

◆ごじょんけ唄

いつの頃からかわかりませんが市内池田石嶺地方では昔から唄によって婚礼の式をあげる珍しい習慣が今尚残っておりました。

婚礼の当日新郎側と新婦側とが美声を競って交互に唄いながら式を進めていくというほおえましいしきたりでありますが，このとき唄うものがごじょんけ唄であります。テンポのゆるやかな追分調のまことに美しくなごやかな名調子の唄です。

唄

1. ここのおにはのにわ松みやれよー
　金のさかずきが　いよなりさがるよー

2. 金のさかずきや　これこれまわせよー
　三度まわしたらすえはおていしゅうさんにおさめよー

3. もろたもろたよ　はなむすめをもろたよ
　あてに　　じゅみはかけぬよー

4. ここのかひんの　五葉の松みやれよ
　一の枝よや二の枝よりも三の小枝をによわせたもれよ

5. もろたもろたよ　千両箱もろたよ
　あてにや花おく枝をやさしのよー

6. かつげかわらけ　なべやのこかげよー
　こまはほせども　にわとおすよー

7. みえたみえたよ　まるやまみえたよー
　この子一人を　この村にたのむよー

8. きんじょとなりもいよたのみますよー
　たのもうたのもうよ　この子をたのむよー

9. 西も東も分らぬ子をばよー
　二人の親たちよたのみますよー

10. たのもうたのもうおたがい　たのむよー
　あてにや花おく　枝をさしのよー

◇とんにやぼ　（片野田）

由来ははっきりしませんが，非常に古くから代々伝わって来たものと云われます。祭典や祝事によく唄い踊られます。

とんにやぼ（ごぜ）は一帯の喜劇もので，劇中の唄は郷土色豊かな心よいもので酒間のにぎやかさにふさわしいメロデーであります。

旦那をはじめ家来，それに大黒，ゑびす，とんにやぼ（ごぜ）等大ぜいが眺めのよい場所で釣をしたり酒を飲んだり，とんにやぼに三味を弾かせて唄ったり大にぎわいの最中，鷹使いの武士主従が来て大げんかとなるが，遂に旦那の勝となり一同めでたく引揚げると云うのでありますが，各々抱腹絶倒のいでたちと，ふるまいが異色あるもので，喜劇物としては市内随一，鳴物は太鼓，三味，ヒョウシ木，鐘，笛，10名位男衆市内片野田地区に残っております。

劇

一　同　今の調子でカレヨシ　カレヨシ（5～6回繰り返しながら円陣を作る）

ゑびす　皆さんここはよいところだ一つ休みましょう。

一　同　休みましょう

ゑびす　一つ楽しみをいたしましょう

一　同　ああいたしましょう

これからゑびすの釣がはじまる

ゑびす　アー喰った喰った喰ったワッハーハハ……

一　同　一しょに　ワッハーハハ……

旦　那　家来三助を呼べ

家　来　三助三助　早く酒をもってこい

三　助　ハイハイ（酒を持って来て盗み飲みをする）

家　来　三助こらこら　やしこっすんな（いやしいことをするなとどなる）

三　助　ハイハイ（恐縮する）

かくて宴たけなわとなる

大　黒　旦那様大黒やの上のかんばんおさかなんちょううたいましょうか

旦　那　ハアーやらさんせ

大　黒　ハアーやらしましょう，とんにやぼーとんにやぼー（呼ぶところ）

とんにやぼ　ハイ ハイ ハイ（とんできて旦那の前に座る）

大　黒　旦那の前が近い　後へすだれ（後へさがれ）

とんにやぼ　ハイ ハイ（後へさがる）大黒様御用とうけたまわりましたが，何の御用ですか

大　黒　大黒やの上のかんばんおさかなんちょううたいましょう

とんにやぼ　やりましょう

これから太鼓，三味でにぎやかな唄がはじまる

唄

大黒大黒　福大黒にさんせ　アテン アテン アテン

すみぐらのすみのなかからお出やった　アテン アテン アテン

あちらのすみでも　ちょこ ちょこ

こちらのすみでも　ちょこ ちょこ

鷹使いの家来　おいおい　おぬし共は此の処をなんとみるか，かたじけなくも，磯のかみうたのすけ様のおいま，御休所にすべり上って，なま大たんなる下りおれッ下りおれッ下りおれと云うに，まだうせぬか

旦　那　さむらいの名を手足にかけて，いかがせん家来切って通れ

家来共　さらば 勝負 勝負

ここで大乱闘となる

大　黒　とんにやぼ とんにやぼけんかそがでよた　あゆんだより ほたがよか（あゆまずに，はらばいでにげる）

三　助　旦那 いけ いけ いけ　きばれ きばれ きばれ

旦那が勝った 勝った　ハハ……

一　同　今の調子で　カレヨシ カレヨシ カレヨシ

一同引きあげる

◈馬　方　踊

島津義弘が江戸に伺候していた時，天然痘がはびこり時の幕府も打つ手がなく多くの人命がつぎつぎに奪われていった。そこで苦しい時の神だのみ，江戸はこぞって踊りを神々に奉納した。ところが不思議や，さしもの天然痘もみるみる下火となった。義弘はこの踊りの偉力にすっかり驚き，これを薩摩に拡げて国家安泰をいのりたいと考え部下２名に命じて練習させ帰藩後一般に拡めたのがこの馬方踊りであると云われています。

せんかめ女が病気（天然痘）の夫といっしょに祈願のためお伊勢詣りをする道中を一幕の劇に仕込んだものであります。

いぶすき民謡中唯一つの女衆もので女性斉唱の美しさは又格別であります。鳴物は太鼓

踊りはテンポのゆるやかな優雅なもので，婦人は紋付，娘衆はすそ模様のきなびやかないでたちで女性美の極致を誇示したものであります。この踊りをとおして婦人は夫への再認識を深めさせ娘衆は結婚への幸福をみいだしたと云われています。

唄

斉唄　あら面白の姫君は，お伊勢に心おもむけば，花の都にしのび入るすずか山思うちすぎて　関のおぢぞに着きにける

馬方　われはもとより馬方なれど，駒に心を勇めやる。　こまはいやる　こまはいやる

妻　　やい馬子駒かりましょ，駒の心はなんと

馬子　なるほど無事にございます

夫　　されば乗るほどに口を頼むぞ

馬子　心得ました

妻　　やい馬子

馬子　はい

妻　　このちょうはなんというぞ

馬子　このちょうは唄のちょうと申してじゅんどう面白いちょうでございます。

夫　まことに馬子が話に変らぬいこう面白そうなよ，なるほどなるほど　やい馬子

馬子　はい

夫　小唄の一つもやろうではないか

馬子　いざやりましょ，さあやりましょ

神はお伊勢のお祓い箱よ

めれば（参れば）その日の祈祷となる

はい，はい，百に三文の飼料につき，何が不足にあるかや，こま勇めやこま

馬子　これがすなわちお伊勢様でございます。

妻　心得ました

馬子　やい軽兵衛

馬子　はい

馬子　神様におつとめの間に小踊りの一つもやろうではないか

馬子　いざやりましょ，さあやりましょ

お痘のぞみにサー　きせ願たてましょサーどっこい

いせにゃ7度熊野にゃ3度サーどっこい

夫　やい馬子いそいで駒をよせおれ

馬子　はい心得ましたあーはい はい

妻　旦那様は早くお馬に召せませ

馬子　心得ました

妻　やい馬子

馬子　はい

妻　旦那様の御下向に小唄の一つでもやろうではないか

馬子　いざやりましょ，さあやりましょ

関のおぢぞは親よりましよ

思い思いの妻たもる

夫　やい馬子，これからいとまやるぞ

馬子　心得ました，若松様よ，若松様よ，やれ駒，やれ駒

◎四　つ　竹

はっきり分っていないが　豊年祭に毎年唄い踊られた郷土民謡であります。唄は民謡調のかるい単調子で誰にでもすぐ唄える聞きよい唄であります。鳴物は太鼓，鐘。踊は一種の手踊りで，唄によく合った快よいもの。男衆十名くらい。

この四っ竹も年々すたれて終いつつあり之が保存に適当な措置をとりたいものです。

1. われわや　　舟波のいさしが娘
　　とののや　御門にうずらがくける
　　のんのこさいさい　おしやげてずいずい
2. 揃うた揃うた　踊子が揃うた
　　稲の出穂より　よく揃うた
　　のんのこさいさい　おしやげてずいずい
3. 音頭とろこが橋から落ちた
　　橋の下でも　音頭とる
　　よかよかさいさい　おしやげてずいずい

◎虫とり唄

現在のように駆虫薬のなかった頃は，農家にとって一番大切な稲の駆虫にはほどこすてがなかった。おちつくところは，干ばつの雨乞いと同じ気持に落付いたのも無理もないことでしょう。毎年発生する稲の虫よけに部落こぞって，鐘の調子に合せてこの虫とり唄を唄いたんぼの周辺一巡してのち，神主ののりとによって虫とりの祭典が行なわれたものであります。現在では優秀な農薬も出来てこの必要がなく随って虫とり唄もすたれてきました。しょんが節によく似たテンポのゆるやかな変化に富んだ美しい唄です。

唄

1. いせのかみくまののかみのおやなれど　いせこそ神の初めなるものを(くりかえし)

2. この里に悪魔のひ虫が入りきたり　そらそれふきもどせ　いせの神かぜ（　〃　）

3. 異国より悪魔のかぜの吹ききたり　そらそれふきもどせ　いせの神かぜ（　〃　）

4. 奥山の　せばのおのこがでてとおる　さわりをうせて　ごこくさかゆる（　〃　）

5. さねもりが　あすはごてんをおたちある　虫をおともに　めしつれて
　　さきはかれゆく　あとはさかえる　あとはさかえる

◆しょんが節

めでたい時に唄うものとして市内各所で盛んでした。祝事の時は勿論ですが婚礼の時の「高砂や」の代りにこの唄がうたわれております。しよんが節は「ごじょんけ唄」と同じ調子でよく似たメロデーをもって居りテンポのゆるやかな追分調の美しいもので聞く人をして陶然とさせます。

この唄はもっぱら年寄達にのみ唄われて，若い青年男女の唄うものを聞きません。踊のないのが残念でありますが年々この唄はすたれていく傾向であり或はこのままでは，今の年寄達の代で終ってしまう恐れがあり，代々唄いつがれて行く方途が講ぜられる様望むものです。

唄

めでためでたの　若松様よ
　　枝も栄える　葉もしげる　エーションガエー
ここの座敷は　祝な座敷
　　こがね花咲き　金がなる　エーションガエー
ここのお庭に　松竹植えて
　　竹は世に出る　松やしげる　エーションガエー

◆指宿港小唄

一年を船で暮す漁師たちが毎年正月二日に身の安全と海の幸を祝い合うしきたりは古い昔から盛んでありました。この祝いの時によく唄われたものに船唄があります。唄は謡曲や浄るりによく似た風格あるもので唄の句も，かぶき調で，いかにも正月の祝いにふさわしいものであります。

市内民謡中ただ一つの海の唄として貴重な一ぺんでありますが惜しくもこの船唄の唄い手である指宿市湊の肥後喜一郎氏と中村喜太郎氏の二人が相前後して故人となり二人の録音が最後のものになってしまいました。

エイヤーエ　ヨイヤーサノサー　サーサー内に召しませ
やかたの内には金小判で山をとりたて十七，八の姐さんが盃をもって祝うてあげましょう。
ともえ　ともえ　ともにもうします　なんと承わりましょう
たちごろしおも　よさそうにござる　表は碇に向けます　それ一段とようござる
やぞー　やぞー　やぞー　　いぞー　いぞー　いぞー

えぞー　えぞー　えぞー　とり梶　オットおも梶　オット今の梶とってそうろう
やーい　めでたいな　五葉はめでたの若松よ　枝も栄ゆる葉もしげる
なおもめでたいな　めでたのやもい港にこぎついた
これも　船頭衆のしあわせ　ドン　ドン　ドン

◇いぶすきの唄

1. 南白風そよふけば
夢がこぼれる　白砂に
青い蘇鉄の　浜つづき
ないて鷗も　むれてとぶ
ああ指宿の街ようつくし

2. 波の引きたるなぎさ辺に
掘ればわきくる　砂風呂よ
湯富の昔も　しのばれて
遠くながめる　サツマ富士
ああ　指宿の街ようつくし

3. カルデラ燃える池田湖に
ツゲの小林(こだち)の　影ゆれて
およぐ若鮎　姫鱒よ
潮(うみ)のほとりを　さまよえば
ああ　指宿の街ようつくし

◇指宿温泉小唄

1. お湯の指宿湯の川湯ぎり
しげるゴムの木　やし並木
なすもメロンも　冬になる
（ソレ）みんなみ指宿お湯の町

2. 海の青さよ潮引くころは
出湯砂風呂　ほのぼのと
ピーチパラソル　夢の花
（ソレ）みんなみ指宿お湯の町

3. まねく小島よ知林ケ島は
魚見岳から　浜つづき
潮がみちくりゃ　かえられぬ
（ソレ）みんなみ指宿お湯の町

4. 寄する黒潮かつおの海に
かすむ屋久島　佐田岬
雲の帯した　お開聞
（ソレ）みんなみ指宿お湯の町